Osaka University Knowledge Archive

Title	センター長就任にあたって
Author(s)	山田, 朝治
Citation	大阪大学大型計算機センターニュース. 1987, 65, p. 2-3
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/65729
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

センター長就任にあたって

山　田　朝　治

前大型計算機センター長小泉光恵先生が停年退官されたため、この4月からセンター長をお引受けすることになった。歴代センター長をはじめ学内外関係各位の御努力、御協力のお蔭で、今日まで発展し続けてきた本センターが、私の代になってから運営がもたつくようでは大変である。私なりに精一杯頑張って、センターの機能やサービス業務を少しでも強化拡充できるようにつとめたい。ご承知のように大型計算機センターでは、大規模計算の超高速処理のみならず、学術情報の収集、提供業務も大きな役割の一つになってきている。つまり、センター機能の多様化が要求されるようになってきた。国内センター間だけでなく、国際間のネットワークも整備され、さらにデータベースやプログラム・ライブラリが充実してゆけば、センターを中心としたすばらしい研究環境が形成されるのではなかろうか。

話は変るが、私は常日頃、研究には“カン”が大切と考えている。カンというより“ひらめき”といった方が体裁は良さそうであるが、ひらめきという程の才能はもともと私にはない。前から親しくしているトポロジーの専門家も「数学もカンが大事や」と相槌を打ってくれたが、研究職以外の人からもよくカンの話を聞く。新聞もコンピュータによって編集する時代になったが、短い時間内にnews valueの大小を決め、見出し語をつくる。あれこれ考える時間的余裕などない。見出しは、その記事を書いた記者が作るものと思っていたが、整理部がその場で作ってゆくらしい。大事な記事を没にしたりする失敗もあると思うが、「結局はカンですね」という。カンとかひらめきとかいうが、人によって表現は違うようである。ある高裁の判事は、“心証”の重要性をしみじみと語ってくれた。高裁ともなると大抵は二審で、一審の書類は積み上げると人の身長ぐらいはあるそうだ。どこに重要なポイントがあるかわからないから、全部目を通さなければならないが、それでも法廷における審理中、被告や証人の動作、態度等に全神経を集中して心証をつかむらしい。白黒の決着をつけねばならない裁判官の苦労が偲ばれる。研究面の苦労も負けず劣らず相当なものであるが、残念ながら私自身カンが鈍ってきたことを自覚している。これは若い人の協力を得なければ、どうにもならないということだろうか。とにかく、若い研究者には良い研究環境のもとで、鋭いカンを発揮してもらいたいものである。

コンピュータの性能が向上すればする程、研究者のカンも益々レベルの高い鋭いものになってゆくに違いない。コンピュータが研究用に使われる限り、私は研究者のカンが大切だと考えている。そうでなくて独創的な研究ができる筈がない。しかし、知識ベースの上にたって、コンピュータに最終判断をさせるような場合はどうなるのであろうか。その判断の良否を人間が判断できるのであ

ろうか。私にはよくわからない。世はまさに情報化時代、医療情報もいずれはデータベースが十二分に整備され、自動化された検査データによって自動的に診断、投薬される日がくるのであろうか。医師法、薬事法がたとえ改正されたとしても、最後はやはり人間名医のカンに頼りたい。

ともあれ、本センターは常に最高レベルのコンピュータシステムを、できるだけ多分野かつ多数の研究者が利用できるようにしなければなるまい。現在、すでにスーパーコンピュータが整備されてはいるが、さらに機能を向上させるため、予算の増額を認めて頂いたので、本年度中に新しいシステムに切替える予定である。また、はじめに述べたように、学内外の学術情報ネットワークも、ますます強化、拡充される予定であるが、本センターがこのような多様な機能を十分に発揮できるように努力してゆきたいと考えておりますので、今後とも関係各位のより一層の御協力をお願いします。